

私の東京オリンピック体験 “誇りと感動”

日本国際フォーラム副政策委員長

千葉商科大学学長

慶應義塾大学名誉教授

島田晴雄

1964年に東京オリンピックが開催された時、私は慶應大学の四年生でした。このオリンピックに私は上級通訳としてお手伝いをしましたが、実は慶應高校時代には私はボート部のコックスとしてオリンピック出場を夢見て練習に励んでいました。高校二年から強化合宿が始まり、年間で150日も合宿しました。ところが、冷たい板に座り続けの負担が災いして痔を悪くし、三年生で艇を降りざるを得ず、オリンピックには仲間だった萬代治君が出場しました。

やや失意のまま大学に進み、気を取り直して英語会に入りましたが、私は普通部出身なので高校と大学の受験を経ておらず、夏休みを過ぎると外部進学者と単語力などの差が開く一方。高校時代に父を亡くしアルバイトに追われながらの辛い毎日でしたが、ある日英語会の仲間に「I shall return.」と言って訣別し、一人黙々と中学校のリーダーから始めて、やがて自分の好きなテーマで作文を作り、近所の宣教師に修正してもらい、テープに吹き込んでもらい、そのテープを何百回も聞き、何百回も暗唱し、声色までそっくりのスピーチが出来るようになりました。それで二年生の時にスピーチコンテストで入賞し、三田でも入賞して、英語会の副委員長となり、委員長に問題があったので私が事実上の委員長として全てを取り仕切り、朝日新聞主催・文部省後援の全国英語ディベートコンテストで準優勝をしました。

その頃、東京オリンピックのために全国から学生通訳が募集され、何万人かの応募の中から二千人が選ばれました。その中の百人は各国団長付になりましたが、私はトップ10人のうちに選ばれ、オランダを志望すると、オランダからオランダ語の通訳が欲しいので英語の通訳は自転車会場に、という連絡がありました。与謝野事務局長がせっかく選んだトップ通訳なのでオランダ団長には通訳を付けないこととし、私は団長付の資格を持ちながら、無任所の遊撃的通訳になりました。そのお陰で、8月後半から11月上旬まで最も重要な場面に派遣され、オリンピックの真髄をとことん味わう幸運に恵まれました。最初の一

ヶ月はプレスセンター、9月後半から羽田空港で出迎え、開会式、主要競技の決勝戦、閉会式、各国選手団の送り出しなどです。

印象深かったのは、インドネシアの選手団を迎えた時、スカルノ大統領のやり方をアメリカが批判し、選手団は機内にとどまったまま一日過ごし、日本の土を踏まずに帰った時でした。見送る私の眼から涙が止まりませんでした。そんな中で、大学の川田寿先生のゼミだけは許可を得て参加させて戴きました。羽田から五輪の旗をはためかせた黒塗りのクラウンを慶應大学の南校舎の階段に横付けし、胸に日の丸のユニフォームでゼミに参加しました。授業をほとんど欠席している私を教務課の女性職員たちがいろいろ助けてくれました。

10月10日は快晴、国立競技場を埋め尽くした世界中の観客。華やかな各国の選手団、聖火台を駆け上がる坂井選手、紺碧の青空に大きく描かれた五輪。演出した航空自衛隊ブルーインパルス飛行隊はこの時初めて成功したと後で聞きました。この感動、そして日本人であって良かったと思う誇り、この思いは一生忘れられません。

選手村では体操界の華と言われたベラ・チャスラフスカ選手とディスクォーダンスをしたのも貴重な思い出です。怒濤の走りで優勝した100mのボブ・ヘイズ選手、巨体から鞭のように柔軟なパンチを繰り出すドン・フレーザー選手の決勝戦等々、名場面に立ち合った感動。水泳王国だった日本が最後によりやくメダルを勝ち得た800m決勝では、水泳好きの私は思わず観客総立ちの中でプールサイドを駆けていました。

闘いで結ばれた友情を互いに温め合った閉会式など、語り尽くせない思い出が今でも鮮やかに脳裏に浮かびます。それから二週間ほど、母国に帰る選手団を羽田まで送り届ける毎日で、私のオリンピック体験は完了しました。お世話になった教務課の女性職員をパレスホテルにお迎えして食事を御馳走したことを覚えています。

オリンピックは国民とりわけ若い人々にかげがえのないものを残します。2020年東京オリンピックを大いに期待し、歓迎したいと思います。

『三田評論』2013年11月号より転載